

2024年1月6日(土)

令和6年度大阪大学国語国文学会

日本語史における節連結の類型

北崎勇帆(きたざきゆうほ・本学准教授)

yuho.hmt@osaka-u.ac.jp

1 はじめに(自己紹介)

- ・ これまでにやってきた研究内容の紹介
 - ・ ① 命令形式の条件形式化、意味変化と機能変化の関係性
 - ・ ② 「従属節の階層構造」史
 - ・ ③ 文法史と文体史の交渉
- ・ そこから発展的に考えたいこと

1.1 テーマ① 命令形式の条件形式化、意味変化と機能変化の関係性

- ・ 命令・希求を表すことを中心的な職務とする(はずの)命令形が、以下のように条件文を構成することができる。これは、命令形が本来有した機能ではない。→北崎(2016, 2018b)

(1) a. 犬にせよ猫にせよ、手間がかかることには変わらない。

b. もういっぺん言ってみろ、怒るぞ。

(2) a. 中納言のにもあれ、大納言にてもあれ、かばかり多かる所に、いかでこの打杭ありと見ながらは[車を]立てつるぞ。少し引きやらせよ。

(落窪物語・巻2・20-落窪 0986_00002,303780)¹

b. 大名「此御せいたうたゞしひおりから、そのつれな事をいふてめいわくするな、よつてみようちはなすほどに (虎明本狂言集・饅頭[1642 写]40-虎明 1642_02030,13150)

c. [あなたを待と呼べないのは]なぜとおいやれ、さいぜん其方がいふには、…

(金岡筆[1690 演]53 下 10)

- ・ この「命令形式の条件形式化」について、主な主張のまとめ2点
 - ・ 統語変化の面から:命令形式の条件形式化は、譲歩文・順接条件文のどちらの場合も、並置された「命令文+後続文」の2文の再分析によって起こる。→北崎(2019a,b)
 - ・ 意味変化の面から:この変化は、意味変化の一般的傾向として指摘される「間主観化」(intersubjectification)の反例にあたる(Shinzato 2002 など)。こうした支配的でない変化が起こり得るのは、当該形式の文末からの相対的な移動を、上の変化が許

¹ 『日本語歴史コーパス』からの引用に際しては、サンプルIDと開始位置を示す。

容するためである。→北崎(2023b)

- (3) a. なかのきみ、「われ、かくて、いみじきさまを見えぬるは、[自身の悲惨な姿を見られてしまったことが] さもあらばあれ。ことよにやはへたる。
(うつほ物語・蔵開下[10C 後半]644-2)
- b. 伊せの海の きよきなぎさは さもあらばあれ われはにごれる 水にやどらん
(玉葉和歌集 2617[1312])
- c. その証拠は余所までも無い、日本にも多い。余の人は然も有らば有れ、〈Yo no fito ua famo araba are₂〉ケイユウが門徒に限っては今宵六波羅へ押し寄せて討ち死にをせう
(天草版平家物語・巻 2-4[1592 刊]40-天平 1592_02004,8370)

1.2 テーマ②「従属節の階層構造」史

- ①から派生して、モダリティによって構成される条件表現として「～(よ)うと」の一群を扱うことに。→北崎(2019a)
- (4) a. 今ハ万事思サマナレバ、内ニナラムトモ院ニ成ムトモ我心也。(延慶本平家物語・巻 4)
b. この胸一つ据ゑたらば、源五兵衛殿でござらうが、業平殿でござらうが、恋の絆に繋ぎ留め、物の見事に添うてみしよ。(薩摩歌[1704 演]51-近松 1704_06002,73890)
- これはト(モ)節・ガ節の側から見れば、包含可能な要素の拡張でもある。このような個別の接続形式の変化については既に研究の蓄積があり、例えば、ナガラ節の場合、「付帯状況」が「逆接」に先行し、カラ節が推量された事態を含むようになるのは、成立期よりも遅れる。
 - 各共時態に観察される「従属節の階層構造」(小田 1990, 南 1993)も、こうした変化の積み重ねによるものと考えられる。→北崎(2023c)
- (5) a. お菓子を食べながら、論文を読む。
b. 言葉に出さないながら、感謝はしている。
- (6) a. 針袋帯び続けながら〈奈我良〉里ごとに照らさひあるけど人も咎めず
(万葉集・18-4130・10-万葉 0759_00018,45090, 付帯状況)
b. 大空はくもらずながら神無月年のふるにもそではぬれけり
(大和物語・20-大和 0951_00001,186530, 逆接)
- (7) a. お菓子を食べ{る/*るだろう}ので、手を洗う。
b. お菓子を食べ{る/るだろう}から、手を洗う。
- (8) a. ソレその結構[≡お人好しが]過ぎたから親を阿呆にしをるわいの
(心中宵庚申[1722 演]51-近松 1722_21003,12700)
b. モウ夜があけるそふだ。坂見屋も来やせふから。きげんを直しなせんし
(甲斐新話[1775 刊]52-洒落 1775_01010,130080)

- ・ こうした機能変化の傾向について、北崎 (2022b) では、特に原因・理由節を対象に、「成立当初は話者によって推量される事態を含まず、後に含むようになる」という変化類型が生じることを主張した。

- (9) a. もんぞどもハ、よるもおそろしく候ほどに、かすがまちに候くらにあづけおきて候。
 (典侍局讓状案・正応 5 [1292] 鎌倉遺文 17802・吉田 2000:79)
- b. スルニ、カタカラウホドニ云ワウニモ^{カタウ}詔ナウテハカナウマイゾ
 (史記抄・弟子列伝 [1477] 3-132-14)
- (10) a. そのまま上罷り上られてござるさかいに〈sacaini〉、伺もえ致しまらせいで、この分に罷り居るが、御異見を頼みまらす。
 (コリヤード懺悔録 [1632 刊] 18-29)
- b. そんなら元がね三百両出してやらふさかいに二人ながら出てゆけ
 (身代山吹色 [1799 刊] 小林 1977:323)
- (11) a. 「ヤレうろたへ者、どこへ行く」「お暇が出たで去にまする」
 (心中二腹帯 [1722 演] 湯澤 1936:526)
- b. 坊主、咽喉が乾いたらうで、水かわりに、好きなものを遣るぞ。
 (泉鏡花・日本橋 [1914] 286-10)

1.3 テーマ③ 文法史と文体史の交渉

- ・ 今回の話とは直接は関係しないが、最近は、「文体の持つ特徴が文法変化に与える影響の異なり」にも興味あり。
- (12) a. 衆生の〔於〕此の 瞻部の内にマレ、或は〔於〕他方世界の中にマレありて、作レル所の種々の勝(れ)たる福因には、我レ今皆悉ク随喜を生ず。(衆生於此瞻部内 或於他方世界中 所作種種勝福因 我今皆悉生隨喜)
 (西大寺本金光明最勝王經古点・巻 2 [830 頃] 北崎 2018a)
- b. 何として知ぞなれば、其国の風土を譽つ、そしつ^{ホメ}つして、歌を作て歌ふ程に、其を以て知ぞ。
 (毛詩抄・巻 1 [1539] 1-6-1・北崎 2023b)

2 本発表で考えたいことと議論の前提

- ・ 特に①②の発展として、以下の前提に基づき、日本語史における節連結の発生や変化についての類型化を行う。
 - ・ 節連結の形式の発生について、その素材や発生のプロセスがある程度一般化可能であること。
 - ・ 節連結の形式の成立後の変化について、その変化の方向性が(少なくとも原因・理由形式においては)ある程度一般化可能であったこと。

2.1 類型論の立場から

- 「文法化」研究からは、以下の一方向的な仮説が提案されている。
 - “parataxis-to-hypotaxis hypothesis” (Givón 1979, Harris and Campbell 1995, Hopper and Traugott 2003, Heine and Kuteva 2007)
- (13) a. parataxis > hypotaxis > subordination
 (並列) (疑似並列) (従属)
 -dependent +dependent +dependent (依存)
 -embedded -embedded +embedded (埋め込み)
 (Hopper and Traugott 2003: 177)
- b. [S₁ + Demonstrative] [S₂]: I understand that: He will come.
 > S₁ [Complementizer + S₂]: I understand that he will come.
 (Heine and Kuteva 2007: 241)
- しかし、これは仮説としては「強すぎる」ことも指摘されている。
 - Diessel (2019): (前置的な) 副詞節の場合、独立文の並置(上の “parataxis”)が構造的な資源となることは、ほぼない。

Table 4: Frequent source constructions of preposed adverbial clauses

Condition	juxtaposed sentences (Haiman 1985) temporal <i>when/while</i> -clauses (Traugott 1985)
Time	adpositional phrases / nominalizations (Genetti 1991) pre- and postnominal relative clauses (Givón 1991)
Cause	adpositional phrases / nominalizations (Genetti 1991) quotative / complement constructions (Ebert 1991)
Purpose	adpositional phrases / nominalizations (Schmidtke-Bode 2009) quotative / complement constructions (Güldemann 2008)

Diessel (2019: 109)

- Weiß (2020): 指示詞系の補文標識の成立のプロセスは、指示詞から直接変化したのではなく、関係節化を前提と考えなければならない。
- 日本語にも(13a)のような事例が見出させるのは確かだが(→①、14a)、(14b)のような例は、明らかにこれに当てはまらない。
- (14) a. [S₁ …はさもあらばあれ。] [S₂ …] → [S[…はさもあらばあれ、] […]]
 b. [S₁ V さかいに。] [S₂ …] → [S[…さかいに、] […]]

2.2 日本語史研究の立場から

- 日本語史研究でも、素材となる形式やその変化のプロセスについての類型化が行われている。
- (15) 山口(1980: §15)を私に整理:

- a. 係助詞を前提とするもの…已然形バ、未然形バ、ドモ、トモ
- b. 格助詞を前提とするもの…ヲ、ニ、ノ、ガ(、ドモ、トモ)
- c. 体言・動詞の意義に基づくもの…ナガラ・カラニ・モノカラ、ママニ、ユエ・モノユエ、ナへ(ニ)、ウヘニ、アヒダ(ニ)、ホド(ニ)、ウチニ、モノ系、ニヨリ(テ)、ニツケテ
- d. 用言(助動詞)の活用形によるもの…単独已然形、ミ語法、テ(<ツ)

(16) 仁科(2016)を私に整理:

- a. 「句相当の要素の間の関係を係助詞によって確認することから生じたと考えられるもの」…バ、ドモ、トモ、テモ
- b. 「格助詞由来のもの」…ニ、ガ、ヲ、ノデ、ノニ
 - 「「が」や「を」の場合は、述語と結びつく名詞項であった準体句が肥大し、事柄を表すものとして理解されなおした結果、句と句をつなぐ接続助詞となった」
- c. 「名詞(形式名詞)が関わるもの」…ウチニ、アヒダ(ニ)、ホドニ、ユエ、モノ系、サカヒ、最中・場合
 - 「これも名詞項目中の連体修飾要素が肥大したものだが、時・場所などの意の名詞を蝶番にして、関係が示されるわけである。」
- d. 「用言と接続形式との切れ目の理解の変化によって接続助詞相当の機能を持った形式が新たに生ずるケース」…タラ(tara < tarja < tar-eba / tara < tar-aba)、ナラバ(< nar-aba)、ケレドモ(< maiker-edomo)

- ・ 成立のプロセス(メカニズム)については、竹内(2007)は「ガ・ヲ、サニ、ホドニ」を「格関係から文と文の関係へ」、青木(2014)は「ガ・ヲ・ニ、ホドニ、ノニ・ノヲ・ノガ」を「格から接続へ」という変化として一括している。
- ・ ここに挙げられたもののほか、「並置された 2 文の再分析」(→①)も、プロセスの一類型として認めてよいだろう。
- ・ 理由節が一定の構造から出発すること(→②)や Diessel(2019)なども手がかりに、「資源となる構造の違いが、その節の成立時の機能にどのように影響するか」という観点から整理を行いたい。

2.3 節連結の記述の汎用的な枠組みについて(補足)

- ・ 従属節は、その節が包含可能な要素を基準とした階層的な分類が可能であり(南 1964, 1974, 1993)、同様の整理は、中古語(小田 1990)、近世語(北崎 2023c)など、近代以前の共時態でも可能である。
- ・ ただし、南の 3 分類は異質な 3 つの観点、 α 「従属句相互の包含可能性」、 β 「その従属句がどのような句中成分を含み得るか」、 γ 「その従属句がどのような助動詞を含み得るか」が混在しており(尾上 1999a,b)、「南モデルの A 類・B 類・C 類という従属句三分類は、結局はこの

観点 γ のみに拠っている」(尾上 1999b:80)。

- すなわち、この分類を通時的に適用する場合、含まれる助動詞側には変化がないことを前提としなければならないが、「類を跨ぐ」ような変化の中には包含される側のカテゴリに変化に帰すべき現象もあり(北崎 2021 など)、通時的適用には限界がある。

- (17) a. 明日は雨が降るだろうから、傘を持っていけ。
 b. *本を貸しましようから、読んでみなさい。
 c. [合巻を]みんなおめへに。あげやうから。よんでみな 中にやあ。^{あは}愁れにおもしろいのも有やせう (花街鑑[1822 序]52-洒落 1822_01062,56850・北崎 2021)

- この点に留意して、ここでは、汎用的な枠組みとして Role and Reference Grammar (「役割指示文法」、以下 RRG) を参考にする²。RRG は文に(18)の3層の構造を設定し、結びつく層(^{junction}接続)と、依存の度合い(^{nexus}接合)の2つのパラメータの組み合わせに基づいて節連結の統合性を記述する。

- (18) a. ^{nucleus}内核=述語
^{core}中核=内核+ ^{obligatory argument}必須項
^{clause}節=中核+ ^{periphery}周辺の語句
- b. 節 [周辺の語句 中核 [項 内核 [述語]]]
 節 [図書館で 中核 [本を 内核 [借りた]]]
- (19) a. ^{cosubordination}連位接続: [+distributional, +operator] (+分布上の依存、+文法的属性の依存)
 b. ^{subordination}従位接続: [+distributional, -operator]
 a. 支配位置: argument+ b. 付加位置: argument-
 c. ^{coordination}等位接続: [-distributional, -operator]

- 以下は大堀(2014)による南の分類の整理(参考)。上に行くほど統合度が高いと考える。

- (20) 内核・連位接続…連用形形容詞
 内核・従位接続…テ形補助動詞
 内核・等位接続…連用形反復
 中核・連位接続…ナガラ(継続)、ツツ、テ(様態)
 中核・従位接続(支配位置)…ノ・コト
 中核・従位接続(付加位置)…ノデ・ノニ・ナラ
 中核・等位接続…テ2(継起)
 節・連位接続…ト、ナガラ(逆接)、タラ、テ3(理由)、テモ等

² Foley and Van Valin (1984), Van Valin and Lapolla (1997), 大堀(2000, 2014), Ohori (2023) など。ただし、本発表は RRG による記述そのものを主目的とするものではない。

節・従位接続(支配位置)…引用ト

節・従位接続(付加位置)…カラ1、ケレド1

節・等位接続…ガ、シ、テ4(前置きの)、連用形3、カラ2(判断の根拠)、ケレド2

文・等位接続…カラ3(前置きの)、ケレド3

3 節連結形式の成立

- ・ 本発表ではひとまず、複文に以下の分類を設定し(Cristofaro 2005, Croft 2022:§15-19 などに拠る)、複数の節の連結を担う形式を節連結形式(linkage marker)と呼ぶ。

(21) a. 従属節

1. 関係節(非対称的・埋め込み)

2. 補文節(対称的・埋め込み)

3. 副詞節(非対称的・別イベント)

(目的、時間(前、後、同時)、条件(仮定条件、譲歩)、理由…)

b. 等位節(対称的・別イベント)(等位、選言、逆接)

- ・ 日本語のいわゆる「接続助詞」の成立を中心として、その歴史的な記述を広く収集し、特に「どのような構造を資源として副詞節・等位節が生まれるか」という観点を基準に整理すると、以下の3種類にまとめられる。

(22) I. 関係節由来:関係節と主節との間の関係の再分析

II. 節並置由来:終結節と後続節との間の関係の再分析

III. 節連結形式由来:既存形式の形態素境界の再分析

3.1 関係節由来

- ・ 従来、「格助詞から接続助詞へ」「形式名詞から接続助詞へ」などとされてきたもの。よく知られている事例として、ガ(石垣 1955)、ノデ(原口 1971)、ホドニ(吉田 2000)の例を示す。

(23) a. 女のまだ世経ずと覚えたるが人の御許に忍びて

(伊勢物語・石垣 1955:28・「主格形式第二類」)

b. 女系喜シト云テ行ケルが、怪ク此ノ女ノ気怖シキ様ニ思エケレドモ

(今昔物語集・巻27・石垣 1955:40)

(24) a. コレきさまたちやア。お客が気にいらねへので。そうやすくするのか。

(宝這入・享和2[1802]原口 1971:34・準体助詞+格助詞的?)

b. とんだものが舞込んだので、自己の思付を題無にして仕舞やアがつた。

(七偏人・初編上[1857]原口 1971:35・接続助詞ノデ)

(25) a. ありはてぬ命待つ間のほどばかり憂きこと繁く思はずもがな

(古今 965・20-古今 0906_00019,12280)

b. まづこなたの心見はててと思すほどに伊予介上りぬ。

(源氏・夕顔・吉田 2000:85・「時間的用法」)

c. もんぞどもハ、よるもおそろしく候ほどに、かすがまちに候くらにあづけおきて候。

(典侍局讓状案・正応五年[1292]鎌倉遺文 17802・吉田 2000:79・「因果」)

- ・ これらはいずれも「述語を含む節が主節の項となる」という関係節的な構造を元とする点で共通する。このほか、未然形バ(<ム+ハ、大野 1955:325)やバカリニ・ダケニのような副助詞を構成要素に持つものもここに位置付けられるか。³

(26) a. [NP [N 用言-連体形]=助詞] 述語 > [従属節]=LM [主節]⁴

→未然形バ(-8C, 大野 1955)、ニ(-8C, 山口 1980:§10)、ヲ(10C, 近藤 1986)、モ(10C, 伊牟田 1957, 此島 1977)⁵、ヨリ(10C?)、ガ(11C, 石垣 1955)、カラ(15-17C, 湯澤 1929)、デ(18C, 湯澤 1936)など。

ニヨリテ(13C, 吉田 2007)、ヲモチテ(10C, 大坪 1981:512-517)なども、複合格助詞からの転成と見る。

b. [NP [N 用言-連体形]=準体助詞]=助詞] 述語 > [従属節]=LM [主節]

→ノニ(18C, 青木 2014)、ノデ(18-19C, 原口 1971)、ノヲ・ノガ(天野 2011・2014)

cf. ガニ(北陸)、モンデ(中部)

c. [NP [N 用言-名詞化接辞]=助詞] 述語 > [従属節]=LM [主節]⁶

→クニ(-8C, 山口 1980:§11)、サニ(10C, 竹内 2005)

d. [NP [NP [N 用言-連体形]=副助詞]=助詞] 述語 > [従属節]=LM [主節]

→バカリニ(16C, 馬 2016)⁷、ダケニ(19C, 宮地 2014)、ギー(<キリ、九州、有田・岩田・江口 2019)

e. [NP[N[N 用言-連体形] 名詞]=助詞] 述語 > [従属節]=LM [主節]

→モノ系、ユエ(-8C)、タメニ(-8C, 吉田 2011)、ママニ(<「まにま(に)」、10C, 久永 1960)、ケ(ニ)(<「験」?、9C)、トコロ系、ホドニ(10C, 吉田 2000, 竹内 2006)、アイダ(10-11C, 峰岸 1959)、トキニ(13C, 小川 1991)、クセニ(15C, 川島 2019)、サカイデ・ニ(15-16C, 亀井 1936, 金田 1977)、オカゲデ(18C, 馬 2017a)、セイデ(<「所為」、19C,

³ 「助詞」の使用は義務的でない場合もある。テ・バなど、接辞として示すべきものもあるが、ここでは = (接語境界)で代表させる。

⁴ 「連体形接続法」(小田 1996)の一部は、無助詞のケースとして考えればここに入るが、名詞が単独で独立語文を作れること(「名詞の中止」(山中 1961, 森山 2016)を重視すると、3.2 で扱う現象に含まれる。

⁵ 『日本国語大辞典』(小学館、第2版)の語誌欄は終助詞モの転成を想定する。その場合は、3.2のタイプになる。

⁶ 接辞ではないが、「連用形+サマニ」(青木 2010:第4部)も名詞化を経由する点でこれと似る。

⁷ 初期の例は「V タメバカリニ」に偏ることが指摘されており(馬 2016)、連体修飾のタイプに含める方がよいかもしれない。

馬 2017b)、……

- ・ この共通する性質から、以下の特徴が導かれる。
- ・ 関係節はそれ自体が確定的な事態として主節に参照されるため、基本的には仮定的な関係(仮定条件)を作りにくい。仮定条件を構成できるのは、以下のような環境に限定される。
 - ・ 埋め込み節が前提として主題化される場合 (cf. Haiman 1978)、もしくは、埋め込み節が仮定的な事態を含む場合 (cf. 高山 2014) …未然⁸
 - ・ 底名詞が前提条件を表せる場合 (cf. 大場 2021) …トキ⁹、場合、カギリ
- ・ それ以外の意味関係(継起、逆接、目的、理由など)は、構造ではなく、構成要素となる助詞や底名詞の意味が影響する。構成要素となる助詞の偏りについて、以下の一般化が可能¹⁰。
- ・ ガ・ヲは素材になりにくく、斜格項(特にニ・デ)の例が多い(現代語について、田中 2010, 益岡 2011, 松木 2014 の指摘あり)。

(27) a. ニ系¹¹:ニ、カラニ、ノニ、ケニ、ホドニ、サカイニ、トコロニ、タメニ、ワリニ、ナリニ、サニ、クニ、ダケニ、バカリニ…

b. デ系:デ、ノデ、モノデ、セイデ、オカゲデ、サカイデ…

 - ・ これは、関係節の主要部が副次補語になる場合には再解釈が起りやすい(必須補語の場合には起りにくい)、ということの意味するか。¹²
- ・ ガ(・ノ)・ヲが含まれるのは、連体形・準体助詞による準体句(26a,b)と、連体修飾(26e)のうち底名詞がモノ・トコロの場合に限られる。

(28) a. ガ(・ノ)系:ガ、トコロガ、ノガ(、モノ?)

b. ヲ系:ヲ、トコロヲ、ノヲ(、モノヲ?)

 - ・ このうち、連体形・ノ・トコロはいずれも、いわゆる「主要部内在型関係節」を構成するケース。こうした場合に限って必須補語が副詞節になる素地を持つことができると考

⁸ ムニ、(ム)ニオイテハ、ウニハ(外山 1969)なども仮定条件を表せるが、これは節成立後の話と考える。

⁹ Kuteva et al. (2019)は CONDITIONAL の素材に (1) COPULA, (2) S-QUESTION (polar question), (3) SAY, (4) TEMPORAL の4種を立てており、このうちの(4)に該当する(e.g. *since*)。(1),(3)は少なくとも日本語の場合、素材にコピュラ、発話動詞を含むことはあるものの、条件形式との複合であることが効いている(e.g. ナラバ、トイエバ)。

¹⁰ 底名詞との関係については丹羽(2012)、松木(2014)の整理が詳しい。

¹¹ ニを取るものの中に、現代語では無助詞を許容するものも多いが(タメ、サカイ、アゲク、ワリ…)、例えばタメ・サカイなどは古くは助詞がある方が一般的であるので(亀井 1936, 吉田 2011)、ひとまずこのようにしておく。

¹² RRG は、必須項を「中核」レベルの連結、デ・ニなどの周辺的語句はそれより外側の「節」レベルの連結と考える。埋め込みの位置が文の核に近いとそれだけ(述語前への他の項の介入を許さない)ので、別のイベントとしての副詞節的解釈を受けにくくなる、と読み替えられる。

える¹³。

3.2 節並置由来

- 3.1に加えて、第1節でも触れた以下の構造変化を、一つの類型と考える。

(29) [文 …。][後続文 …。] > [従属節] LM [主節]

- この構造変化は、以下の文タイプに見出される¹⁴。

(30) a. 平叙文

→不十分終止(10C-?, 南 1959, 京極 1966, 小田 1995)、ゾ(12C, 北崎 2023a)・ジャ・ダ(15C, 湯澤 1929:186)、ゾの係り結び(-8C, 柳田 1985)

b. 疑問文

→ヤラ・カ(間接疑問)(15C, 高宮 2004)、ヤラ(例示)(18C, 岩田・衣畑 2011)、カの係り結び(-8C, 柳田 1985, 野村 1995)

c. 感嘆文

→ワ(20C, 北崎 2023a)

d. 願望文

→ガナ(10C, 山内 1970, 北崎 2023a)

e. 命令文

→(デ)アレ(9C, 北崎 2016)、テミロ(13C, 北崎 2018b)、ナゼトイエ(18C, 湯澤 1936)

(31) そのなかに宮の御めのと子、六条大夫宗信、かたきはずづく、馬はよわし、に井野の池へ飛んでいり、うき草かほにとりおほひ、ふるひみたれば、かたきはまへをうち過ぎぬ。

(高野本平家・宮御最期・南 1959:35)

(32) a. 京、六波羅の逸り者共、あわや!事が出来たわ<ua>と言うて馳せ向かわうぞ:

(天草版平家物語巻 2-4 [1592 刊] 40-天平 1592_02004,4180)

b. 煮たわ焼いたわ、掃いたわ拭いたわ、継いだわはいだわ、その間には一太と継子が泣くわ笑ふわ、まるで朝から晩まで牛か馬のやうに扱き使はれてゐる。

(婦人倶楽部 1925-6・広田花崖「滑稽家庭諒解運動」60M 婦俱 1925_06037,3960)

(33) a. <ただの受領のよからむをがな>とこそ思ひつるに、まして上達部にあなり。

¹³ ノガ・ノワは、ノニ・ノデと比べて、「接続助詞」らしさが弱いことにも注意したい(天野 2011, 2014)。主要部内在型関係節は、関係節(名詞句)の一種と見る立場(黒田 1999 など)と副詞節と見る立場(三原 1994 など)、その両者に連続性を認める立場(坪本 1995)がある。ここでは、古代語の準体句の中で発生が遅れること(近藤 2000: §7・3, 鈴木 2007)も踏まえ、「関係節の後発的な用法」が再分析を経て副詞節化したもの(26aの一部)として位置付けておく。

¹⁴ 已然形単独節(「助詞の助けを借らず単独で前提となる」(石田 1939:70))と後続節の関係もこれに当たるか。

(落窪物語・巻 4 [986] 20-落窪 0986_00004,104770)

b. さらむ者がな、使はむとこそおぼゆれ。

(枕草子・281・20-枕草 1001_00281,1190・能因本 279 は「さらん人をかな」)

c. 此ノ女、「何ヲガナ形見ニ嫗ニ取セム」ト思ヒ廻スニ、

(今昔物語集・巻 16-9 [12C 初] 30-今昔 1100_16009,12690)

- ・ 3.1 との決定的な違いは、構造的に「ゆるい」ところから始まる点。埋め込みを前提としないため、等位節や、(等位的な関係を前提とした)副詞節・補文節になりやすいと考える。

(34) a. 等位節…不十分終止、ワ、ヤラ(例示)

b. 条件節…テミロ、ナゼトイエ(、初期のガナ?)

c. 譲歩節…アレ・セヨ

d. 補文節…ヤラ・カ(間接疑問)

- ・ ただし、項を列挙するタイプのゾの場合、初期の例に既に埋め込みがあるので、(節並置を想定せずに)最初から「引用節の名詞化」(奥津 1993, 青木 2022)というプロセスを経るものとするほうがよいかもしれない。

(35) サナケレバ大臣ゾ又大内(納)言ゾニ成リ、又ハ下郎ナレドモゲス徳人ニ成タリスル也。

(明恵上人仏光観聞書 [13C 前半か] 18 ウ 1・山口 1987:725)

3.3 既存形式由来

- ・ 新しい形式の資源にはもう一つ、単一もしくは複数の既存形式の再分析に基づくものがある。仁科(2016)の(16d)に相当。この場合、素材となる節連結形式の機能を引き継ぐものと考えられる。

(36) a. 既存形式の複合によるもの(cf. 小柳 2018 の「複合機能語化」)。

→連用形(<得?、-8C, Whitman 2008)、テ(<ツ、-8C, 『あゆひ抄』など)、ミ、ナラバ(< nar-aba, 13C, 小林 1979)、タラバ(15C-?, 小林 1996)、テモ、トモ、トテモ、カラトテ、ツモ(18C 文語、神戸 2021)

※ツ・ヌ・ナリ・タリ(鈴木 1993, 岩田 2006・2007, Kinuhata et al. 2009)、シ(鈴木 1990)など、「不十分終止」(→3.2)を前提とするものはここに含めて考える。

b. 形態素境界の再分析によるもの。

→ナガラ(<ナ(or ノ)+カラ、-8C)、ガテラ?、ケレドモ(15C, 西田 1978)、ケレ(17C, 湯澤)¹⁵、バツテン(< -{o/(r)e}ba=tote、前田 2017)

¹⁵ 「「数こそ多けれ、すぐれたるは少し」の「多けれ」が、「多いが(けれども)……」の意味を表す場合のあるところ

- (37) a. 法師ニテモ絵書カム事ハ憚り有マジケレドモ、内裏ノ絵所ニ召テ被仕ムニ便無カル
ベケレバ、 (今昔物語集・巻 31-4・30-今昔 1100_31004,1540)
- b. 父子相食トハ父ヲ殺シ子ヲ殺シテ食ゾ。サハ有マイケレドモ民ヲ恵ン為ゾ。
(寛永本蒙求抄・巻 10[1529]湯澤 1929:214)
- c. 別ノ花ヲモ云ワフケレドモ松下ノ枯體ト云題ヂヤホドニ松花ト置クナリ
(江湖風月集抄・巻 2[1633 刊]43 ウ・西田 1978:50)

V-maiker-edomo > V-mai=keredomo

- (38) a. 山川も依りて仕ふる神ながらく長柄激つ河内に船出せずかも
(万葉集 1・39・10-万葉 0759_00001,19890)
- b. 弥彦神の麓に今日らもか鹿の伏すらむ裘着て角つきながらく奈我良
(万葉集 16・3884・10-万葉 0759_00016,33300)

N=na kara > N=nagara > (V-i=nagara >) V-inagara

- 本発表では「節を連結する機能が何に由来するか」を基準としたため、i サマニ (3.1)、i テ、i ナガラ (3.3) のような、「接辞 (ここでは連用形) が節連結形式の一部となる」ケースは複数の分類にまたがる。連用形は「TP レベル以上の投射が現れることのできない小さな節を形成する」(田川 2012:205) 環境に出現することが多く¹⁶、これを資源とする場合に、状態修飾のような小さな節 (南の「A 類」) が形成されるという点には共通性を見出すことができる。

4 節連結形式の機能変化

- 形式の成立後に生じる変化については、資源となる構造からの直接的な一般化は難しい。ただし、以下のような類型を見出すことはでき、このことには、第3節で述べた構造的資源の間接的な関与が想定できる。

4.1 「理由」への変化とその後の拡張

- 理由節の資源についてはまず、意味変化の傾向から説明が可能であるように見える。
 - to CAUSE の資源について、Kuteva et al. (2019): (1) back, (2) ergative, (3) follow, (4) give, (5) here, (6) locative, (7) matter, (8) place, (9) purpose, (10) say, (11) since (temporal), (12) temporal
 - 上で挙げた事例はそれぞれ、以下の類型に当てはまる。
 - back: オカゲ

から、「けれ」そのものに「が」「けれども」の意味がある様に考えた」(湯澤 1936:507)、下例のようなもの。

・おく様もをなご、おれも女子、器量こそちがはふけれ、わしが…… (傾城二河白道・湯澤 1936:506)

¹⁶ 文法的属性 (ここではテンス) が主節に依存する節は、そうでない節と比べて統合の度合いが高い (RRG の「文法的属性・操作子の依存」)。

- locative, place: デ(・ノデ)、トコロデ、サカイデ
 - purpose: タメニ
 - since, temporal (Traugott and König 1991): ホドニ(竹内 2006)、アイダ、マ
マニ、トキハ、テ
- ・ このことは裏返せば、関係節が理由節へと、直接的に発達することが少ないということも意味する。理由節は、従属節の事態と主節の事態が別イベントとして「従属節事態 P が主節事態 Q を引き起こす」という関係を持つ。こうした意味関係は、単一のイベントである関係節の構造では表現され得ないため、時間節などの経由が必要となると考えられる¹⁷。
 - ・ 次に、理由節内の変化について。北崎(2022b)では、多くの理由節が後発的に「推量された事態を含むようになる」ことを示した。これは、時間的関係の再解釈によって生まれる理由節が、内容的な関係性(雨が降って地面が濡れた)のみを含意でき、認識的な関係性を表しにくいことの表れである。この変化は、「統合度が弱くなる」方向に進む変化であると言える。
 - ・ 関連して、竹内(2007)は、ガ・ヲ・サニ・ホドニが接続助詞化する際、初期は(39a)「意味のない語用論的な連関がある」ところから、(39b)「意味内容同士に時間ないし場所的な連関が希薄」な例が見られるようになることを指摘する。ガ節の場合は理由節と同様に推量を含む例が得られるのが遅く(北崎 2022a, 39c)¹⁸、このことと並行的に捉えられるかもしれない。

- (39) a. 長門前司といひける人の女二人有けるが、姉は人の妻にてありける
(宇治拾遺物語・竹内 2007:175)
- b. おのれは風呂に唯ひとりあると言うたが、この群集は常より多いは何ごとぞ
(エソポのハブラス[1593 刊]竹内 2007:176)
- c. 其ならば、ゆきゆいてとよまうが、古点はゆいてもつと点したぞ。
(毛詩抄・巻 1[1539]北崎 2022a:122)

4.2 「様態」からの変化

- ・ 様態節が継起的事態や逆接に変化するケースは 4.1 と同様、「一体的なイベントから異なる 2 つのイベントの連結へ」という方向性を持つ。すでに挙げたナガラその他、中世のツツ(山口 1972)、鹿児島方言のサマニ(久保蘭 2011)にも同じ傾向が窺える。
- (40) a. 其辺ちかき侍の家におろしをきつつ[≠ながら]、宰相ばかりぞ門の内へは入給ふ。
(平家物語・少将乞請・山口 1972:62)
- b. そのころ勝^{カツレンアンジ}連^{ムスメジャウ}按^{ムスメジャウ}司に、無比類よか女上がをると聞きさまに、あちらへはへいて、…

¹⁷ 底名詞自体が「理由」の意味を持つ場合、すなわち、「結果」「原因」「理由」など(有田 2021)は除く(オカゲもこれに準ずる)。並置節の場合には、不十分終止による以下のような例がある。

・かしこに人もなし、渡りたまひね。(=「……人もなければ」)(落窪物語・小田 1995:19)

¹⁸ ケレドモは素材にマイを含むので、成立当初から推量された事態を含むことができる。

(大和口上物語集[元禄頃]久保蘭 2011:68, 「継起」)

c. ウラニガケガゴワッセーナ、ソングケノシテエナ、ニワニナ、ムシロオヒイテ、ソシテアーユーワランジオツクイカタ。(裏に崖がございましてね、その崖の下にね、庭にね、(西郷さんは)むしろを敷いて、そしてああいう草鞋を作っている。)

(岩山トク氏談話[1856 生]久保蘭 2011:67, 「並列関係」)

4.3 埋め込み節化と接辞化

- 3.2 に示した並置節の構造は、その後、より統合度の高い構造へと変化することがある。
 - Kinuhata et al. (2009)、岩田・衣畑 (2011) は、ヤラ・ナリが、注釈構文を経て例示の用法を獲得し、名詞句として使われる用法(～やら～やらを)に発達することを示す。
 - 命令形による譲歩条件も、漢文訓読語においては「マレ」が例示に特化したことを契機に、副助詞化したと見られる。(北崎 2018a)

(41) a. そばで泣くやらわめくやら。行き来も止まるばかりなり。

(卯月紅葉[1706 演]岩田・衣畑:67)

b. 板やら釘やら方々へ手配して

(鳩灌雑話[1795 刊]岩田・衣畑:75)

- 3.3 のうち、連用形・テによって構成される補助動詞(「V1V2」型の複合動詞と「V1 テ V2」型のいわゆるテ形補助動詞)は、歴史的に発達したものである(青木 2013, 金水 2006 など)。これは文法的意味を付加する一種の接辞化であり、(様態のテなどとは異なり)他の項の介入も許さないのも、より統合度の高い構造への変化であると言える。¹⁹

5 おわりに

- 節連結形式の成立について、以下の3つの類型を設定し、その性質から導かれる傾向の一般化を行った。

(42) a. 関係節由来

- 仮定的な関係性を作りにくい。
- 副次補語は素材になりやすく、
- 必須補語が素材になるのは主要部内在型関係節を構成できる場合に限られる。

b. 節並置由来

埋め込みを前提としない、統合度の弱い節が構成される。

c. 既存形式由来

¹⁹ 大堀(2002)はテ節が「内核接続」を構成するようになることと、バ節の交替指示(switch reference)の弱化をもって「接続構造の通時的変化の一般的傾向は、構文スキーマとしてより強い節の統合性をもつ方へと向かう」(p.311)と一般化する。

1. 素材となる形式の機能を引き継ぐ。
 2. テ・ナガラなど、接辞が形式の一部になる場合 (a のケースも含む) は、小さな節が構成される。
- ・ また、形式の成立後の変化については、以下の両様があり得ることを示した²⁰。関係節由来の場合には (43a)、節並置由来の場合には (43b)、既存形式由来の場合には (43a,b) の両方と結びつくということが (42) の一般化から言えそうではあるが、これはあくまで二次的な関係性に過ぎないかもしれない。
- (43) a. 統合度が弱まる変化…理由節・ガ節 (内容→認識)、様態→継起・逆接
 b. 統合度が強まる変化…例示化と名詞句化、接辞化、ケレドモ節 (認識→内容)

参考文献

- Cristofaro, Sonia. 2005. *Subordination*. Oxford Studies in Typology and Linguistic Theory. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William. 2022. *Morphosyntax: Constructions of the World's Languages*. Cambridge: Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/9781316145289>.
- Diessel, Holger. 2019. "Preposed Adverbial Clauses: Functional Adaptation and Diachronic Inheritance." In *Explanation in Typology*, edited by Karsten Schmidtke-Bode, Natalia Levshina, Susanne Maria Michaelis, and Ilja Seržant, 97–122. Berlin: Language Science Press. <https://doi.org/10.5281/ZENODO.2583812>.
- Foley, William A., and Robert D. Van Valin. 1984. *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, Talmy, ed. 1979. *Discourse and Syntax*. New York: Academic Press.
- Haiman, John. 1978. "Conditionals Are Topics." *Language* 54 (3): 564–89.
- Harris, Alice C., and Lyle Campbell. 1995. *Historical Syntax in Cross-Linguistic Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511620553>.
- Heine, Bernd, and Tania Kuteva. 2007. *The Genesis of Grammar: A Reconstruction*. Oxford: Oxford University Press.
- Hopper, Paul J., and Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization*. 2nd ed. Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kinsui, Satoshi. 2007. "The Interaction between Argument and Non-argument in the Diachronic Syntax of Japanese." In *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, edited by Bjarke Frellesvig, 253–61. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Kinuhata, Tomohide, Miho Iwata, Tadashi Eguchi, and Satoshi Kinsui. 2009. "Genesis of 'Exemplification' in Japanese." In *Japanese/Korean Linguistics Vol.16*, edited by Yukinori Takubo, Tomohide Kinuhata, Szymon Grzelak, and Kayo Nagai, 87–101. Stanford: CSLI.
- Kuteva, Tania, Bernd Heine, Bo Hong, Haiping Long, Heiko Narrog, and Seongha Rhee. 2019. *World Lexicon of Grammaticalization*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/9781316479704>.
- Ohori, Toshio. 2023. "The Structure and Semantics of Complex Sentences." In *The Cambridge Handbook of Role and*

²⁰ なお、Kinsui (2007) は日本語の統語変化に、centripetal change (求心的変化、e.g. 項化) と centrifugal change (遠心的変化、e.g. 節化) の 2 種を立て、間接疑問文、カの係り結び、主要部内在型関係節の成立を前者に、ガ・ヲの接続助詞への変化を後者に位置付けた上で、この両者があり得る理由を、日本語が OV 型であることとゼロ代名詞を許容することに求める。本発表の立場からは、この両者があり得る (→42, 43) のは、統合度の異なる複数の構造が資源としてあり得る (→42) こと (これは Diessel 2019 などに従うならば、日本語特有の事情ではない) から説明される。

- Reference Grammar, edited by Delia Bentley, Ricardo Mairal Usón, Wataru Nakamura, and Robert D. Van Valin, Jr., 525–56. Cambridge: Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/9781316418086.017>.
- Shinzato, Rumiko. 2002. "From Imperatives to Conditionals: The Case of -Shiro/Are and -Te Miro in Japanese." *Chicago Linguistic Society*, 38: 585-600.
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511620904>.
- Van Valin, Robert D., and Randy J. LaPolla. 1997. *Syntax: Structure, Meaning, and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Weiß, Helmut. 2020. "Where Do Complementizers Come from and How Did They Come about?: A Re-Evaluation of the Parataxis-to-Hypotaxis Hypothesis." *Evolutionary Linguistic Theory* 2 (1): 30–55. <https://doi.org/10.1075/elt.00014.wei>.
- Whitman, John. 2008. "The Source of the Bigrade Conjugation and Stem Shape in Pre-Old Japanese." In *Proto-Japanese: Issues and Prospects*, edited by Bjarke Frellesvig and John Whitman, 294:159–73. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. <https://doi.org/10.1075/cilt.294.13whi>.
- 青木博史 (2010) 『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房。
- 青木博史 (2013) 「複合動詞の歴史的变化」影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』ひつじ書房, pp.215–241.
- 青木博史 (2014) 「接続助詞「のに」の成立をめぐる」青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究 2』ひつじ書房, pp.81–105.
- 青木博史 (2022) 「文相当句の名詞化」青木博史・岡崎友子・小木曾智信 (編) 『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房, pp.89–108.
- 天野みどり (2011) 『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院。
- 天野みどり (2014) 「接続助詞的な「のが」の節の文」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編) 『日本語複文構文の研究』ひつじ書房, pp.25–54.
- 有田節子 (2021) 「因果関係と時間—「原因」「結果」を主名詞とする連体修飾節を中心に—」嶋田珠巳・鍛冶広真 (編) 『時間と言語』三省堂, pp.167–184.
- 有田節子・岩田美穂・江口正 (2019) 「甑島里方言の条件表現」窪菌晴夫・木部暢子・高木千恵 (編) 『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』くろしお出版, pp.157–181.
- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店。
- 石田春昭 (1939) 「コソケレ形式の本義(上)(下)」『国語と国文学』16(2,3), pp.66–82, 68–82.
- 伊牟田経久 (1957) 「接続「も」の発生について」『広島女子短期大学研究紀要』8, pp.15–22.
- 岩田美穂 (2006) 「並列形式「ナリ」の変遷」『待兼山論叢 文学篇』40, pp.75–89.
- 岩田美穂 (2007) 「大蔵虎明本狂言集の原因・理由を表す接続形式について—その体系化のために—」青木博史 (編) 『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房, pp.93–113.
- 岩田美穂・衣畑智秀 (2011) 「ヤラにおける例示用法の成立」『日本語文法』11(2), pp.60–76.
- 大坪併治 (1981) 『平安時代における訓点語の文法』風間書房。
- 大野晋 (1955) 「萬葉時代の音韻」『万葉集大成 第6巻(言語編)』平凡社, pp.287–330.
- 大場美穂子 (2021) 「「場合」を底の名詞とする連体修飾」『日本語と日本語教育』49, pp.1–25.
- 大堀壽夫 (2000) 「言語的知識としての構文—複文の類型論に向けて—」坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』ひつじ書房, pp.281–315.
- 大堀壽夫 (2002) 「「交替指示」構文の通時相—統語変化とカテゴリー化—」大堀壽夫 (編) 『シリーズ言語科学 3 認知言語学Ⅱ:カテゴリー化』東京大学出版会, pp.297–321.
- 大堀壽夫 (2014) 「従属句の階層を再考する—南モデルの概念的基盤—」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦 (編) 『日本語複文構文の研究』ひつじ書房, pp.645–672.
- 小川栄一 (1991) 「延慶本平家物語に見える原因・理由の接続助詞句トキニ」『福井大学教育学部紀要 第I部 人文科学 国語学・国文学・中国語学編』39, pp.1–13.
- 奥津敬一郎 (1993) 「引用」『国文学 解釈と教材の研究』38(12), pp.74–79.
- 小田勝 (1990) 「中古和文における接続句の構造」『国学院雑誌』91(8), pp.38–47.
- 小田勝 (1995) 「中古和文における不十分終止」『国学院雑誌』96(10), pp.14–24.
- 小田勝 (1996) 「連体形接続法—源氏物語を資料として—」『国学院雑誌』97(10), pp.28–37.
- 尾上圭介 (1999a) 「南モデルの内部構造」『言語』28(11), pp.95–102.
- 尾上圭介 (1999b) 「南モデルの学史的意義」『言語』28(12), pp.78–83.
- 金田弘 (1977) 「長年寺蔵『法宝蔵海』と接続辞サカイ」近代語学会 (編) 『近代語研究 5』武蔵野書院, pp.227–239.

- 亀井孝(1936)「理由を表はす接続助詞「さかいに」」『方言』6(9), pp.29-37.
- 川島拓馬(2019)「逆接形式「くせに」の成立と展開」『国語国文』88(4), pp.55-68.
- 北崎勇帆(2016)「複合助詞「であれ」「にせよ」「にしろ」の変遷」『日本語の研究』12(4), pp.1-17.
- 北崎勇帆(2018a)「訓点資料における動詞命令形の放任用法」『訓点語と訓点資料』140, pp.71-89.
- 北崎勇帆(2018b)「順接仮定条件的に用いられる命令形式の成立と展開」『国語国文』87(5), pp. 43-55.
- 北崎勇帆(2019a)「「～(よ)うと」の一群の成立と展開」『日本語文法』19(1), pp.3-19.
- 北崎勇帆(2019b)「「さもあらばあれ」の条件形式化」『日本語学論集』15, pp.160-144.
- 北崎勇帆(2021)「中世・近世における従属節末の意志形式の生起」『日本語の研究』17(2), pp.19-36.
- 北崎勇帆(2022a)「意志・推量形式の従属節への取り込み」中部日本・日本語学研究会(編)『中部日本・日本語学論集』和泉書院, pp.117-137.
- 北崎勇帆(2022b)「原因・理由と話者の判断」青木博史・小柳智一・吉田永弘(編)『日本語文法史研究 6』ひつじ書房, pp.133-156.
- 北崎勇帆(2023a)「意味変化の方向性と統語変化の連関」ナロック ハイコ・青木博史(編)『日本語と近隣言語における文法化』ひつじ書房, pp.291-318.
- 北崎勇帆(2023b)「不定語疑問文の主題化」の歴史」『日本語文法』23(2), pp.19-35.
- 北崎勇帆(2023c)「近世における従属節の階層性」岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信(編)『コーパスによる日本語史研究—近世編—』ひつじ書房, pp.137-155.
- 京極興一(1966)「終止形による条件表現—「平家物語」を中心として—」『成蹊大学文学部紀要』1, pp.29-35.
- 金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.
- 久保蘭愛(2011)「中央語と鹿児島方言における「動詞連用形+サマニ」の史的展開」『語文研究』112, pp.17-33.
- 黒田成幸(1999)「主部内在関係節」黒田成幸・中村捷(編)『ことばの核と周縁—日本語と英語の間—』くろしお出版, pp.27-103.
- 神戸和昭(2021)「『雨月物語』における接続助詞「ツモ」をめぐる覚え書き」『語文論叢』36, pp.1-11.
- 此島正年(1977)「いわゆる逆接の「も」」『国語研究』40, pp.13-23.
- 小林賢次(1979)「中世の仮定表現に関する一考察—ナラバの発達をめぐって—」中田祝夫博士功績記念国語学論集刊行会(編)『中田祝夫博士功績記念国語学論集』勉誠社, pp.297-322.
- 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房.
- 小林千草(1977)「近世上方語におけるサカイとその周辺」近代語学会(編)『近代語研究第 5 集』武蔵野書院, pp.309-353.
- 小柳智一(2018)『文法変化の研究』くろしお出版.
- 近藤泰弘(1986)「接続助詞「を」の発生時期について」松村明教授古稀記念会(編)『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院, 近藤(2000)所収.
- 近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房.
- 鈴木浩(1990)「接続助詞「し」の成立」『芸芸研究』64, pp.149-168.
- 鈴木浩(1993)「ナリによる並立表現における選択用法成立の経緯」『国語学』173, pp.28-40.
- 鈴木浩(2007)「続日本紀宣命の準体言」『歌子』15, pp.196-178.
- 高宮幸乃(2004)「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」『三重大学日本語学文学』15, pp.124-110.
- 高山善行(2014)「条件表現とモダリティ表現の接点—「む」の仮定用法をめぐって—」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦(編)『日本語複文構文の研究』ひつじ書房, pp.279-297.
- 田川拓海(2012)「分散形態論を用いた動詞活用研究に向けて—連用形の分析における形態統語論的問題—」三原健一・仁田義雄(編)『活用論の前線』くろしお出版, pp.191-216.
- 竹内史郎(2005)「サニ構文の成立・展開と助詞サニについて」『日本語の研究』1(1), pp.2-16.
- 竹内史郎(2006)「ホドニの意味拡張をめぐって—時間関係から因果関係へ—」『日本語文法』6(1), pp.56-71.
- 竹内史郎(2007)「節の構造変化による接続助詞の形成」青木博史(編)『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房, pp.159-179.
- 田中寛(2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房.
- 坪本篤朗(1995)「文連結と認知図式—いわゆる主要部内在型関係節とその解釈—」『日本語学』14(3), pp.79-91.
- 外山映次(1969)「条件句を作る「ウニハ」をめぐって」佐伯梅友博士古稀記念国語学論集刊行会(編)『佐伯博士古稀記念国語学論集』表現社, pp.447-467.
- 西田絢子(1978)「「けれども」考—その発生から確立まで—」『東京成徳短期大学紀要』11, pp.49-60.
- 仁科明(2016)「助詞の史的変遷」中山緑朗・飯田晴巳(編)『品詞別学校文法講座 5 助詞』明治書院, pp.271-

- 丹羽哲也(2012)「連体修飾節構造における相対補充と内容補充の関係」『日本語文法』12(2), pp.78-94.
- 野村剛史(1995)「カによる係り結び試論」『国語国文』64(9), pp.1-27.
- 原口裕(1971)「ノデ」の定着」『静岡女子大学研究紀要』4, pp.31-43.
- 久永紀子(1960)「「まに」の変遷」『甲南大学文学会論集』11, pp.25-36.
- 馬紹華(2016)「「ばかりに」の原因用法の成立について」『日本語学論集』12, pp.318-300.
- 馬紹華(2017a)「原因・理由を表す「おかげで」の成立について」『日本語学論集』13, pp.84-68.
- 馬紹華(2017b)「原因・理由を表す「せい」の成立について」『訓点語と訓点資料』138, pp.25-45.
- 前田桂子(2017)「近世長崎文献より見る接続詞バツテンの成立について」国語語彙史研究会(編)『国語語彙史の研究 36』和泉書院, pp.231-250.
- 益岡隆志(2011)「原因理由を表すダケニとダケアツテの分化」『日本語・日本学研究』1, pp.1-12.
- 松木正恵(2014)「連体修飾節における底名詞の性質と名詞性接続成分—連体複文構文と連用複文構文の接点を求めて—」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦(編)『日本語複文構文の研究』ひつじ書房, pp.85-127.
- 南不二男(1959)「平家物語における一種の子持ち文について」『名古屋大学国語国文学』2, pp.35-50.
- 南不二男(1964)「複文」森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝(編)『講座現代語6 口語文法の問題点』明治書院, pp.71-89.
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店.
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- 峰岸明(1959)「今昔物語集に於ける変体漢文の影響について—「間」の用法をめぐる—」『国語学』36, pp.54-68.
- 三原健一(1994)『日本語の統語構造』松柏社.
- 宮地朝子(2014)「名詞の形式化・文法化と複文構成—ダケの史的展開にみる—」益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦(編)『日本語複文構文の研究』ひつじ書房, pp.299-322.
- 森山卓郎(2016)「名詞並置型同格構造」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己(編)『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版, pp.65-82.
- 柳田征司(1985)『室町時代の国語』東京堂出版.
- 山内洋一郎(1970)「もが」「かな」と「が」」『文法』2(11), pp.90-95.
- 山口明穂(1972)「中世文語における「つつ」についての問題—意味認識の過程—」『国文白百合』3, pp.58-65.
- 山口堯二(1980)『古代接続法の研究』明治書院.
- 山口佳紀(1987)「国語資料として見た明恵上人関係問書類」高山寺典籍文書総合調査団(編)『明恵上人資料第三』東京大学出版会, pp.705-729.
- 山中鉄三(1961)「体言及び連体形の接続的機能」『国文学』6(6), pp.119-122.
- 吉田永弘(2000)「ホドニ小史—原因理由を表す用法の成立—」『国語学』51(3), pp.16-29.
- 吉田永弘(2007)「接続助詞ニヨツテの源流」『国学院雑誌』108(11), pp.195-206.
- 吉田永弘(2011)「タメニ構文の変遷—ムの時代から無標の時代へ—」青木博史(編)『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版, pp.89-117.

付記 本研究は、JSPS 科研費 23K12192 の助成を受けたものです。